

お爺さん三人の大連の旅(5)

寺西俊英

8月15日(2018年)、棒極島を後にして我々は中山広場の近くにある旧満鉄(南満州鉄道株式会社)の本社に向かった。小雨はずっと降ったり止んだりしている。途中「人民路」という、5つ星ホテル、デパートや銀行などが立ち並んでいる大通りを通った。東京では銀座通りに相当すると言えようか。その中にシャングリラホテル(香格里拉大飯店)があるが、大連では有名で建築後かなり経っているが格式は高い。このホテルの敷地内にシャングリラ公寓というマンション棟が立っている。私の大連での勤務時にこの公寓の21階にある一室を社宅として使用していた。私の部屋は前任者から引き継いだが、家族用なのであろう、140平米もあり単身赴任であったので随分気が引けた。久しぶりに外観を間近で見たが当時のままで安心した。

ホテルの中までは入らずすぐ出発した。5分くらいで目的地に到着した。今回は李さんが建物内の見学の予約をしてくれており中に入ることが出来た。何から何まで気を使ってくれ本当にありがたい。ここは何度も見ているが中に入るのは初めてである。この建物は外観を見るもので中に入れると思っていなかったためだ。中に入る前に二人に見せたいものがあった。建物に面した歩道にはマンホールが2~3個あるが、満鉄のMを図案化したマンホールが設置されておりそれを見てもらおうとしたのである。以前は日本からのお客さんや友人にマンホールを見せ、写真に納めたりしたのだ。ところが無いのである。何の変哲もない鉄製の蓋になっている。少々がっかりしながら入口で50元を支払って入った。チケットには、「満鉄旧址陳列館」と印刷されている。係りの女性がずっと館内を案内してくれて、都度李さんが我々に内容を伝えてくれる。内部は当時のままであり、この廊下を後藤新平総裁が歩いていたのだと思うと感慨深い。総裁室も当時のまま保存されており、執務した机やら調度品が置かれているがやはり歴史を感じさせる。なにしろ満鉄ができたのは今から113年前の1906年(明治39年)であり、後藤新平が初代総裁である。彼は1906年11月



現在は旧満鉄本社内に展示してある満鉄マーク入りのマンホール

から1908年7月までの2年弱就任している。ちなみに1945年の敗戦までの39年間に17人の総裁が就任している。

総裁室の隣の広い部屋に入るとそこには写真やら遺品などずらりと並んでいた。当時の満鉄経営の幅広さが伺える。陳列ケースを順に見て行くと、何とそこに歩道にあったマンホールが何個か置かれていた。やはり当時を知る貴重な歴史遺産と今ではなかったということであろう。別の部屋に販売コーナーがあり、Tさんは満鉄のマークが入った懐中時計を求めた。

ホテルに戻り4人で話をしているうちに台風の影響で風雨が強まって来た。そして6基あるエレベーターが半分動かなくなるというアクシデントが発生した。雨が小止みになった頃、李さんは、明朝空港まで送るから今日は帰ります、と言ってハイヤーで帰られた。夕飯の相談をしていると、もう一人の李さんから連絡が入り今ホテルのロビーに来ているという。3人にお土産を持ってきたというのである。下に急いで下りると紙包みを3個持った李さんが立っていた。明日は朝早く空港に行かれるので今日持ってきたという。見ると有名な鳳梨酥(パイナップルケーキ)と白酒が入っていた。李さんはお店があ

るので、と言ってすぐ帰られた。夕食は雨模様なのでホテルの向かいのレストランで食べ、帰りに近くの果物屋でイチジクを買った。

お二人は今日（8月16日）が最終日である。朝9時15分発のCA951便なので6時半にロビーに集合した。李さんはすでに来ており、チェックインの時払った押金（保証金）などの精算をしてくれた。それからホテル前のタクシーに4人で乗り空港に向かった。7時過ぎに空港の国際線ターミナルに着く。私はあと3日滞在するので、入場口でお別れだ。二人とも大連は初めてなので事前に入場口から先の行き先を簡単な図面に書いたものを渡してある。まずCAのカウンターで航空券を発券してもらい、次に出国カードのある場所に行って書き込む。それから税関・手荷物検査という具合に、図示したのを渡したので安心して李さんと二人で手を振って送り出した。

今回の旅行記はここで終わりのはずであった。ここからが「事実は小説より奇なり」で予想外の展開があった。

8月19日の同じ便で帰国した私は、その日自宅に着いた後、二人に無事を確認するため電話した。するとTさんが言われるには無事には着いたのであるが、大連空港で神様のご加護があったというのだ。入場口からまずCAのカウンターで航空券を発券したまでは良かったのであるが、そのあと出国カードがなかなか見当たらず相当うろうろしたらしい。その時ちょうどそこに居合わせたのがNさんという中国人の女性である。彼女は8月に実母を亡くし実家の遼陽（遼寧省・瀋陽の近く）に帰っており、葬儀も終わったので大連空港から千葉市の自宅に向かうところであった。なにか二人の日本人のお爺さんが困っている様子であったので見るに見兼ねて声をかけてくれたのだ。勿論日本語で。私は、出国カードは受付カウンターと反対側の台にある、と書いたのであるが台の上に無く分かりにくい所であったらしい。すぐNさんが置いてある場所を教えて書き方も確認してくれたのだ。「地獄に仏」は、少々オーバーだが、一緒に税関も通過し手荷物も受け取って広いコンコースに出た。それから搭乗時間までだいぶ時間が有るのでお礼に喫茶店で朝食をご馳走しながら三人で話をし、電話番号を交換したという。

その後Tさんとは時折メールしていたようである

が、Nさんは最愛の母を亡くし、ずいぶん落ち込んでいたらしい。そこでTさんは、「“わんりい”という私が入っている会に入会したら如何？ 中国人も多いし、色々な活動をしているので気がまぎれますよ。」とお話したのである。Nさんは、感謝してすぐ入会したいとTさんに意思表示をした。10月下旬、会費はすぐ入金され我々の仲間になった。会計担当から私に入金の連絡が来たので、先方に電話して初めてお話をした。その後のやり取りの中で分かったことであるが、昨年8月にお母さんを亡くされたが、その前の年の秋にお父さんも亡くされていたことが分かった。さらに昨年の秋には、まだお若い実の姉を病気で亡くすという悲運に見舞われた。1年余りの中で3人もの身内を亡くした悲しみは如何ほどであったことであろう。幸いに二人の立派に成人した息子がいることが、Nさんを立ち直らせたのではと思う。もちろんTさんも都度励まされたようでNさんは随分感謝されている。Nさんは国費留学生として日本に来られた。若いころから苦勞を重ねてこられた様子で、この苦勞が人間を成長させた部分はもちろんあろうが、接してみても優しさや人への気配りや常に控えめなところは生まれ持ったもので、日本人以上に日本人らしさを感じさせる。Nさんは、大連空港でお二人に出会えたのは、亡くなった母の導きと思っていると私に話されたことがある。私が「これこそ中国の諺の〈有縁千里来相会〉ですね」、と言うと「その通りです。感謝しかありません。」と肯いておられた。

この旅行記の第1回目の冒頭に、〈今回の旅はどのようにして二人の中国への認識が好転するに至ったかも、都度出来事を挿入しながら綴っていきたい〉と書いた。二人の優しい李さん、娘さん一家、行き帰りの飛行機の隣の座席の感じのいい中国人、混みあう大連駅での整列乗車など普段テレビなどで見る中国人とはかなり違った印象を受けたらしいが、最も認識が好転したのは、Nさんとの出会いと確信する。今回のお爺さん三人の大連の旅は、珍道中であったが心に深く残る旅となった。三人でコーヒーを飲みながら、また中国に旅をしようと話し合っている。（完）